



インド・新興工業団地近接農村における宗教空間の変容：マディヤ・プラデーシュ州インドールの近郊農村を事例に

相澤，亮太郎

(Citation)

兵庫地理, 53:13-22

(Issue Date)

2008-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002461>



インド・新興工業団地近接農村における宗教空間の変容

—マディヤ・プラデーシュ州インドールの近郊農村を事例に—

相澤亮太郎

1. はじめに

近年、急激な経済発展を遂げつつあるインドは、世界中に優れた IT 技術者を送り出すなど、経済的に大きな注目を集める一方で、「ヒンドゥー教」と呼ばれる独特の宗教的世界が根付いていることで知られる。インド人口の 8 割を占めるとされるヒンドゥー教徒は、食生活や日々の祈りだけでなく、年中行事や冠婚葬祭、ライフスタイルや人生観に至るまで、幅広く多様なヒンドゥー教的世界観の中で生きている。グローバリゼーションや経済発展の影響はインド国内の大都市のみならず、地方都市や農村部にも様々な変化をもたらしているが、そうした変化は、経済的な側面だけでなく、都市／農村のヒンドゥー教的な日常空間においても様々な変化をもたらしているのである。

関根 (2003) は、インド南東部の大都市チェンナイ (マドラス) の歩道空間において、歩道寺院と呼ぶべき祠の設置と移設をめぐるせめぎ合いを取り上げながら、路上に暮らす下位カーストの人びとが、都市計画や行政権力との闘いを日々くり返すことで、「非・場の場」を構築している状況に着目している。関根によれば「非・場」とは、アンリ・ルフェーブル (2000) が国家や資本や科学が日常空間に及ぼす力の作用を「空間の表象」と呼び、マルク・オジェ (2002) が「アイデンティティも他者との関係も、歴史も象徴化されていないような空間」を「非・場所」と呼んだものがイメージされている。つまり、経済発展に伴い道路の立体交差 (フライオーバー) や街路の整備が急速に進められているインド大都市の路上は、「非・場」と呼ぶべき都市の権力が生み出した空間であり、人びとが多様な交通手段によって通過することを目的として造られた空間である。しかし、そうした路上に暮らす下位カーストの人びとは、歩道の樹木に神性を見出したり、夢の中で受けたお告げに従うなどして、ヒンドゥーの神を祀る祠＝歩道寺院を形成している。関根によれば、過去 20 年間、

チェンナイ市内における歩道寺院は急増し、現在確認することができるものだけで、1600 を超える歩道寺院が存在しているという。これらの歩道寺院は、都市に暮らす多くの人びとの信仰や篤志によって支えられ、中には、歩道上の小さな祠だったものが寺院としての体裁を整えるに至るものまで現れる。病気が治った、幸運が訪れた等の霊験譚は遠隔地からの参詣者を集め、それらの歩道寺院に対しては、歩道や道路整備等を含む都市計画事業の遂行過程において容易に立ち退きを求めることができない。関根は、歩道寺院は下位カーストの人びとが都市権力を捉え返すための対抗関係を築く拠点であり、自動車、多様な速度の交通と無数のパースペクティブが交錯するインド大都市の路上に溢れる活力やエネルギーを示すものであり、プリコラージュ¹⁾ が展開する世界の現れであると位置づけている。

関根は、こうした歩道寺院の存在を<都市的なもの>²⁾ という枠組みにおいて捉える一方で、こういった<都市的なもの>は、都市であっても農村であっても同様に見出されるべきものであると述べている。それはつまり、「都市の中に村落があり、村落の中に都市があるというポストモダンな状況」を想定した上での<都市的なもの>である。オジェやミシェル・ド・セルトー (1987) を参照しながら提示された「非・場」の対照項として関根が提示したのは、タミル語における「ウール」という言葉である。それは、日本語における「ムラ」や「わが場所」という意味を持つと同時に、オギュスタン・ベルクの「通態性」にも通じる概念であり、都市／農村という区別を超越したものとして理解することができるとしている。

本稿では、関根が示したような、<都市的なもの>という枠組みや、「ウール」という語にもとづいた「場」「非・場」のあり方を意識しつつ、急激に工業化が展開するインドの都市郊外の農村における宗教空間の変容について論じるものである。インドで

は、ジャーティ (jati) ³⁾ と呼ばれる強固な階層社会が現在も維持されているが、工業団地の成長に伴う経済的な影響が、村内における宗教空間や社会関係にどのような変化をもたらすのか、という点に関心を寄せるものである。

2. 事例地域の概要

インドの経済発展や工業化については、岡橋 (2003) をはじめとした数多くの研究が蓄積されてきた。本稿において取り上げるマディヤ・プラデーシュ (Madhya Pradesh) 州の都市インドール (Indore) 市郊外に位置するチラカーン村についても、既に南埜 (1997)、澤 (1997)、荒木 (1997) らによって詳細な調査が行われ、報告されている。以下、南埜 (1997)、澤 (1997,1998) によるチラカーン村についての報告に依拠しながら、1996 年当時のチラカーン村の概要を示す。特別な断りがない限り、以下は 1996 年 11-12 月に行われた南埜、澤、荒木らによる調査にもとづいたチラカーン村についての概要である。

チラカーン村は、マディヤ・プラデーシュ州西部に位置する都市インドール市の南西 24km の距離に位置する農村である。村の周囲には標高 500-600 メートル程度の平坦な台地上に農地が広がる。村の南西約 3km には国策によって作られたインド最大級の新興工業団地であるピータンプール工業成長センターが立地している。チラカーン村の人口は、1996 年の統計によれば世帯数 215、人口は 1234 人とされ、当時の調査の結果、住民全体のうち旧住民が約 96% を占めており、村内には 14 のジャーティが見出された。主なジャーティの特徴と男子の職業については次の通りである。まず最上位のジャーティであるブラーミン (Brahmin) は、寺院における祭祀を行うほか、自作農と店舗経営、運転手、常勤工場労働者に従事している。村の人口の約半数を占めるドミナントカーストであるカティ (Khati) は、後進諸階級であり、自作農が卓越するが、常勤工場労働者も多い。ブラーミンとカティは村の地主層であるほど農業経営の中心であり、村の中心より南半分に混在しながら暮らしている。後進諸階級には、ジャーティ固有の伝統的職業としての散髪業に従事するナーイー (Nai) や、大工業のパンチャル (Panchal)



図1 インドにおけるマディヤ・プラデーシュ州(MP州)とインドール市の位置

が存在し、彼らは工場労働者となるケースは少ない。またバグリ (Bagri)、バライ (Balai)、チャマール (Chamar) は指定カースト、ビール (Bhil) が指定トライブである。チャマールの男子は農業労働者と常勤工場労働者に、バグリは農業労働者と日雇い工場労働者、バライは零細自作農、指定トライブのビールは農業労働者と工場や建設・運搬などの雑業労働者となっている。一方で、女性については、多くが家事に従事しているとされるが、カティでは自作農、バグリまたはビールでは農業労働者が比較的多いとされ、工場に労働者として雇用される女性は希である。後進諸階級及び指定カーストと指定トライブは、ともに政府による種々の補助事業の対象となっている。たとえば近年、村内にビールを対象とした住宅が政府の補助によって新たに建設されるといったように、各種の補助が政府から提供されている。なお、村落空間の構成としては、集落の中心部分には、ヒンドゥー教のスリラン寺院と呼ばれる寺院が置かれ、ラクシュミとシーターと呼ばれる神々が祭られている。村の中心より北側にはチャマール、ビール、バグリがそれぞれに住み分け、ジャーティごとに特定のエリアを形成している (澤,1997,1998・南埜,1997)。なお、工業労働者が新住民として流入しており、彼らは単身または家族と共に賃貸住宅等に暮らしている。

教育水準については、一般的なインド農村の特徴と同様、男女間の教育水準の格差が大きく、1996年段階では文盲の女性が過半数を占めている。男性においては、ジャーティによる教育水準の差は歴然としており、ブラーミンとカティは前期中等教育を受けている比率が高く、一部には大学進学者も存在している。指定カーストの中ではチャマールは教育水準が高いものの、指定カーストのバグリや指定トライブのビールは、男子においても文盲者の比率が最も多く、教育を受ける機会が極めて少ない。南埜(1997)によれば、約200年前に多くのカティが流入してきた時期に形成された社会秩序が現代まで維持されてきたが、1981年から開発の進められてきたピータンプル工業成長センターの影響が、チラカーン村にとって大きな転換点となるのではないかとされている。

ピータンプル工業成長センターは、無工業県の低開発地域に政策的に誘導された新規造成の大規模工業団地である。同団地には1983年以降、重化学、自動車、機械部門を中心とした多数の工場が新規立地され、その結果、工業労働者や工場から派生した建設・運搬業務に従事する雑業労働者等の雇用機会が創出された。団地周辺では、常勤の工業労働者のための住宅団地が形成されると同時に、雑業労働者の居住するスラムも形成され、食堂、露天商が多数立地した。さらに事業所向けのサービス業労働力需要、野菜や牛乳などの生鮮食料需要が増加したとされる(南埜,1997)。なお、南埜(2007)によれば、2001年にはインドール市の人口は151万人に達しており、内陸の地方都市として著しい発展を遂げている。また同村では、1996年の調査時より、灌漑農業の発展に伴う地下水の枯渇や、工業センターの形成に伴う地下水の汚染等が問題化しているという。

3. インドにおけるヒンドゥー教の概要

山下(2004)によれば、インドとパキスタンが分離独立する以前、ヒンドゥーとムスリムは3対1の割合であったが、現代インドにおけるヒンドゥー教徒は80.5%(6.9億人)と圧倒的多数であり、イスラム教徒が13.4%(1.4億人)、キリスト教徒が2.3%(2400万人)、仏教徒が0.8%(800万人)、ジャйна教徒が0.4%(480万人)であるという。また山

下・岡光(2007:25-26)によれば、近代に至るまで、インドには「ヒンドゥー教」という語彙は存在せず、「インド人」という明確な自己意識・帰属意識も存在しなかったとされる。ヒンドゥー教という概念自体が近代化の過程において構築された概念であるという前提で説明するならば、山下・岡光の説明に従えば、ヒンドゥー教徒は「神話、儀礼体系、文化伝統、生活形態、宗教観念、世界観、因襲に至るまで全てが不可分に結びついた文化複合によって緩やかに規定される集団」である。ヒンドゥー教の成立や教義については数多くの見解があるとされるが、過去に外部から流入してきた民族・宗教と、各地域で土着的に祀られてきた種々の神々が習合され、長い歴史を経ながらヒンドゥーの神々が登場する神話の体系が醸成されてきたと理解することができる。

ヒンドゥーの神々については、たとえばシヴァ、ヴィシュヌ、ガネーシャ、ラクシュミ、サラスヴァティ、ドゥルガ、ハヌマーン等、個々の名称を数多く挙げることができる。神話や聖典、叙事詩等において、神々は時に化身となり、時に生まれ変わりとなって複数の名や性格を有し、それぞれ別の神として祀られている。また地方ごとに人気のある神が大きく異なっていることや、季節の行事ごとに異なる神の祭りが行われている点、さらに、異なる宗教の神や宗教者が、ヒンドゥーの神々の生まれ変わりであるという位置づけがなされており、ヒンドゥーの神々は極めて多様で複雑な宗教的感覚に立脚していることが分かる。ヒンドゥー教によって規定されたジャーティを通じて、かつては、彼らの経済力もジャーティごとに固定的な状態であったが、近年では、工業化や経済発展によって新たな現金収入の機会が得られるようになったジャーティと、従来と変わらない生業を続けるジャーティが存在しており、ジャーティ間の格差が拡大しつつあることが指摘されている(澤,1997)。

ここまで、チラカーン村の概要およびインドにおけるヒンドゥー教の概要を示してきた。筆者は、2007年10月13日から10月25日まで、チラカーン村内および村周辺にある石神の分布調査と住民への聞き取りを行った。調査内容は、石神の位置、祀られた神の名前、由来、祭祀方法、祭祀期間等を確認した。次章では、その調査結果を示す。

4. チラカーン村における宗教空間の変容

1) 寺院の増築

村の中心部において、約 200 年前よりヒンドゥーの神々を祀ってきたスリラン寺院は、1999 年に新たに建物が作られた。スリラン寺院は、村民全員からの寄付によって、建物の増築と新たな神像を設置することができた。村の住民は、祝い事や日々の祈りの場として、この寺院を訪れ、祭祀者であるブラーミンによるプジャ（祈祷）を受ける。また溜池の東にある高台にある寺院では、ハヌマン（猿神）、タジャ（蛇神）、ドゥルガ（女神）が祀られており、現在の寺院の建物は 1984 年に造られたものであるとされる。これらの寺院において、村の人びとは朝 7 時から夜 8 時までの時間に自由に祈りを捧げることができるが、夕方、これらの寺院では鐘を鳴らし、人々に祈りの時間を知らせている。通常、夕方の祈りの時間は午後 7 時から午後 8 時までであり、自宅等の祭壇でも祈りを捧げるという。

聞き取りによれば、寺院の祭祀を司るジャーティであるブラーミンは、近接するピータンブール工業団地の成長に伴う村の経済発展について肯定的な意見を有していた。耕作者が工業労働者となり、その結果、寺院も造築され、神像を新たに設置することができ、村の人々もみな便利な生活を手に入れた。近年の村の変化としては、耕作物が変わり、井戸が増え、道路がコンクリートになり、賃貸用の住宅が造られ、電気が通り、バイクやトラック、トラクターやジープなどが増えたことなどを挙げた。衣服や食べ物も変化し、かつてはトウモロコシや小麦、豆が主な食物だったが、最近では米、ジャガイモ、バターなどが使われるようになったという。

日常的な祭祀以外には、たとえば村の上位カーストであるブラーミンやカティの人びとが結婚するときにはスリラン寺院に参詣するという。しかし、指定カーストや指定トライブの人びとが結婚する際には、村の北東側の耕作地内にあるマリマタと呼ばれる祠（後述）に詣でて祈りを捧げるとされる。村外への参詣については、村から約 1km ほど西に行った山の上に、古くからシヴァ神の像が祀られていたが、隣のダール県の村がそのシヴァ神を祭るために新たに建物を作り、毎年祭りの時期には、チラカーン村からも住民が揃ってそのシヴァ神の像に祈りに



写真1 スリラン寺院の祭壇（複数の神像や写真、祭祀具等が置かれている。澤宗則氏撮影）

行くという。

2) 石神祭祀の充実化

ヒンドゥーの神々は、ブラーミンなどが祭祀を司る寺院に限らず、路傍に置かれた石や木の根もと、岩などにも祀られている。チラカーン村やインドール市内では、関根が歩道寺院として示したような祠や寺院の形態を取るものだけでなく、朱色または赤色に塗られた石を数多く認めることができる。それらはいずれも神像として、もしくは神の現れる場所の目印としての役割を果たし、祭祀の対象とされている。本稿ではこれらの、朱色に塗られた石の神を「石神」と称す。これらの石の由来については、古くから祀られていて由来を確認することができないものも多かったが、近年新たに設置されたものについては、「山の上から、汚れていない清浄な石を持ってきて設置した」との由来を確認することができた。また本稿では、これらの石神がヒンドゥー教の体系においてどのように位置づけられているのかということや、人々の日常生活全体において、これらの石神の祭祀がどのような意味や役割を持っているのかという点については詳述しない。しかし、たとえば

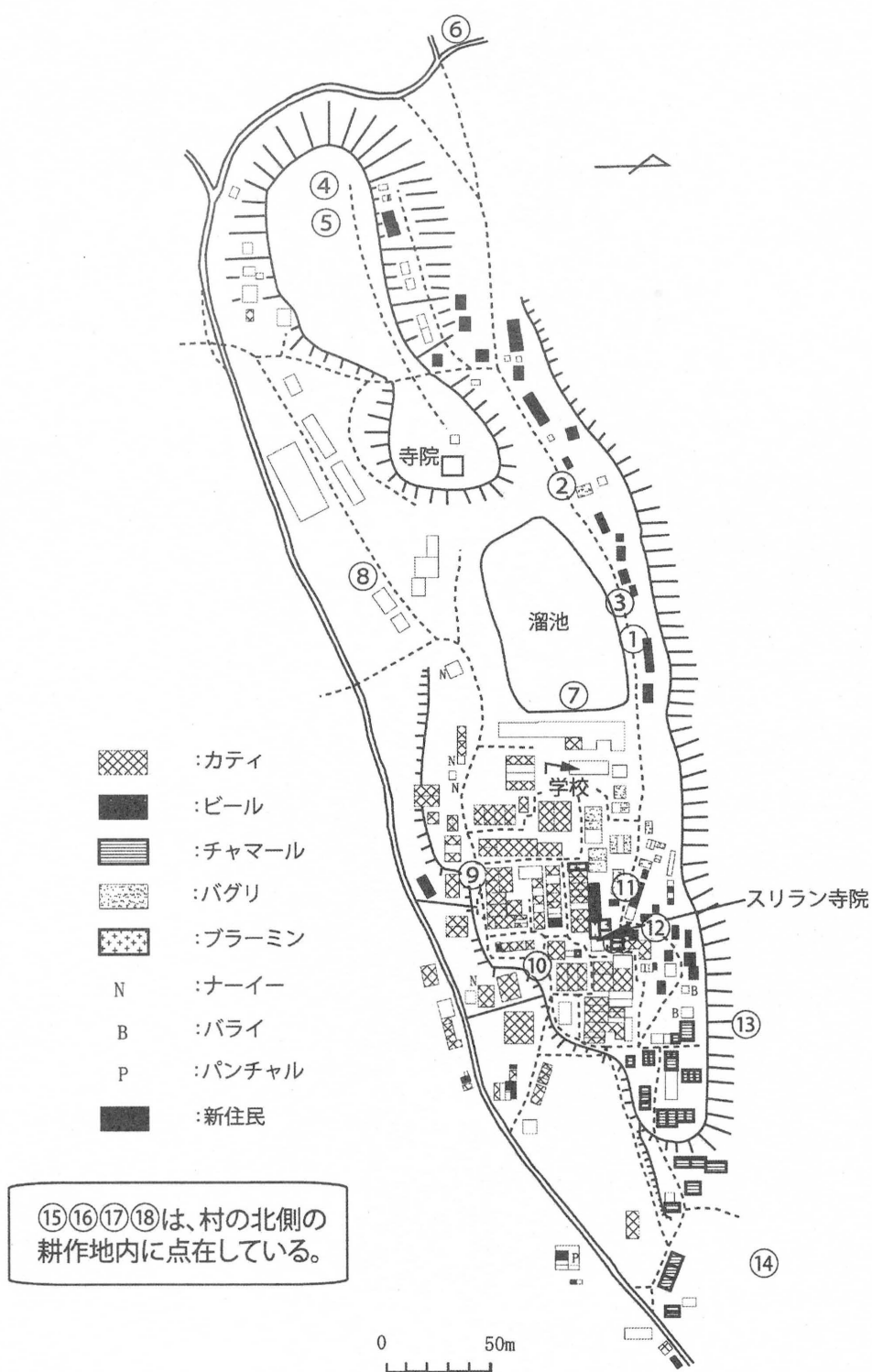


図2 チラカーン村における石神の分布

(南埜(1997)に示された図「チラカーン村における各ジャーティの居住分布」に、筆者による現地調査の結果を記入したもの。⑮～⑱は、地図の範囲外の村の北側の耕作地内に点在している。村の南側の耕作地は未調査である。)



写真2 インドール市内の石神の祠（街路樹の根もとに石が置かれ、朱色に塗られている。）

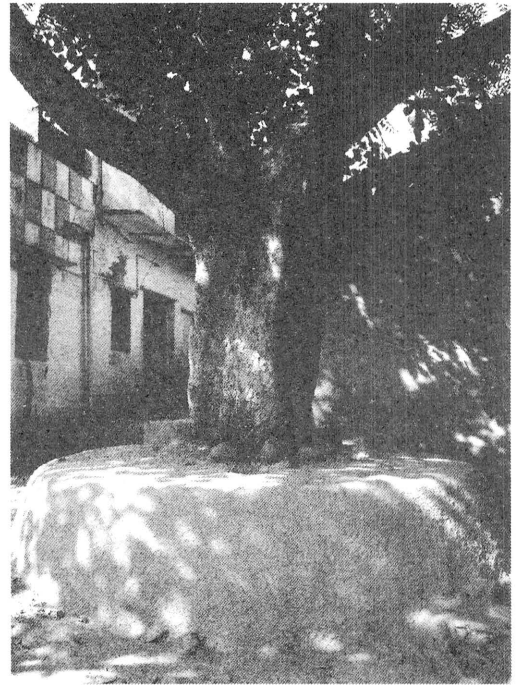


写真3 チラカーン村の石神（図2の㊸）（木の根元に置かれた数個の石が朱色に塗られている。）

山下・岡光（2007）が、「田園地帯の神々」「不可触民の寺」として、チラカーン村の石神に類似した石の神を紹介していることや、川口（2001）がネパールのカトマンズ盆地において人びとが神像にティカと呼ばれる赤い粉を付けて祈りを捧げる風景を取り上げていることなどから、ヒンドゥー教においては、広く見られる風習であると推察することができる。

石神は朝夕の祈りの対象となり、様々な神の名がそれぞれの石に付けられておいる。なお、石神に塗られた朱色の塗料は、チラカーン村においては、毎年、雨季が終了するころに塗り直されているという。調査結果にもとづき、図2ではチラカーン村における石神のロケーションを示し、以下の「石神の名称一覧」において、図2に対応するチラカーン村における石神の名称と、由来等について示した。

石神の名称一覧

- ①バイラヴジ（ビールの1世帯）：3年前に自宅前に設置。家族が所有。②が先にできたので、続けてこちらにも設置した。
- ②バイラヴジ（ビールの1世帯）：宗教的な理由と幸福を願って、5年前に自宅前に設置。家族が所有。

- ③ブートババ&バイラヴジ（ビールの1世帯）：20センチ程度の大きさの二つの石を土の祠で覆う。二つの石は兄弟の神であるという。以前から祀っている。
- ④カルカ寺院（ビール）：ビールの人たちが女神ドゥルガを祀るための寺院。
- ⑤バイラヴジ（ビール）：④の女神ドゥルガを守り共に闘う神。
- ⑥ピールババ（村全体）：ビールの男性の夢にお告げがあり、村のために建てた。
- ⑦パリア・マハラジ（人名と推測される。カティの1世帯）：25年前に溜池で亡くなった男性のために溜池の縁に建てられた石神。今も月命日にその家族が祈りを捧げている。
- ⑧パリア・マハラジ（人名と推測される。カティの1世帯）：不明
- ⑨バイラヴジ（カティ）：古くから祀られている。カティの人びとが祈りを捧げる。
- ⑩アジパル・マハラジ（カティ）：25年ほど前に⑨の家が大きくなったために分家し、その際、新しい家にも石神を祀りたかったために設置した。

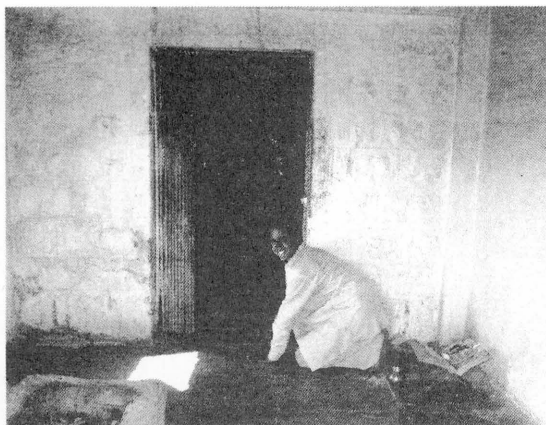


写真4 チラカーン村のハヌマン神（中央奥。溜池の東にある高台の上にある寺院に祀られている。）

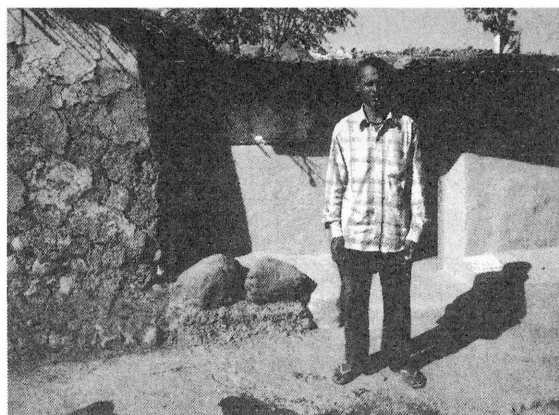


写真5 チラカーン村の石神（図2の⑪）（男性の自宅の前に置かれた二つの石。土埃をかぶっているが、祀られたものであるという。）

- ⑪ガディワンババ（村全体）：不明
- ⑫バイラヴジ（カティ）：⑩と同様の理由で、約 50 年ほど前に設置した。
- ⑬ベリ・ドゥンディマタ（村全体）：耳が聞こえない人が聞こえるようになった。耳の病氣治癒を祈る。7月1日にココナツやバナナを捧げる祭が行われる。毎年異なる家族が供物を提供する。
- ⑭サトゥマタ寺院：昔から祀っている。チャマールの家族が毎月 15 日に祈りを捧げている。結婚した夫婦が、サリーや装飾品、ココナツなどを捧げる。ヤギは捧げない。
- ⑮マリマタ（村全体）：村の人びとが毎日祈りを捧げる。⑭と同様の捧げものをする。2003 年に村人からの寄付によって屋根のついた祠が作られた。指定カーストや指定トライブの人びとは、結婚の際にこの石神に祈りを捧げる。チャマールの人びとはヤギやお酒を捧げる。
- ⑯バリヴァジ（収穫の神）：不明
- ⑰バリヴァジ（収穫の神）：不明
- ⑱サティマタ（バグリ）：昔、ある家族が祭祀を始めた。バグリの人びとがクルキデヴィという神を祭る。祈る方法は⑭や⑮と同じ。毎日花を供えている。

2007 年の調査時、チラカーン村には、長年カティを中心に祀られてきた石神がある一方で（⑨⑩⑫）、指定トライブのビールの人々によって新たに祀られ始めた石神の存在を確認することができた（①②③）。また他の石神と同様の形態でありながら、溜め池で

亡くなった人を祀るための目印のように置かれたものも存在している。それらは、亡くなった人の記憶をとどめるためのものであり、池に落ちて亡くなった人の家族が、今も月命日に祈りを捧げているということであった。つまり、石神が私的な出来事の記憶装置としての役割も果たしていることが分かる（⑦⑧）。一方で、個人的に祀られている石神が、放置されたまま「ただの石」に戻りつつある状況も見られた（⑧）。石神の祭祀が中断・放棄された理由については不明であったが、石神の祭祀は寺院ほど安定的ではなく、容易に設置される反面、常に祭祀が中断される可能性もあるということを示している。

村の中心部にある寺院の建物は 10 年ほど前に建築されたが、⑮のマリマタと呼ばれる石神では、2003 年に屋根と柱によって雨を防ぐことができる建物が造られた。指定カーストや指定トライブの人びとが結婚する際には、このマリマタに詣り、祈りを捧げるといい、建物の建設費用は住民らの寄付によって賄われたという。

祀られる神の種類は様々であるが、聞き取りによれば、⑬のベリ・ドゥンディマタや①②⑤⑨等のバイラヴジと呼ばれる神は、ベルー（Bheru）と呼ばれる神であるとされ、女神ドゥルガを守り共に闘う神であるという。そのため、ドゥルガを祀る寺院に近い位置に設置されることが多いが、ドゥルガとは関係なく村のあちこちに単独で祀られている。村の人びとは、ベルー神には正午に祈りを捧げているといい、他の石神も、それぞれに祈る時間や特定の日

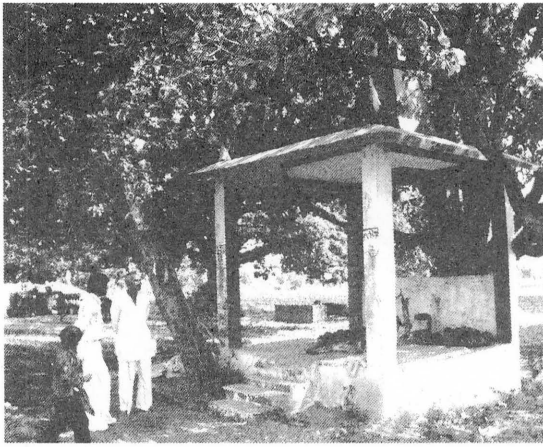


写真6 チラカーン村の石神マリマタの祠（図2の⑮）（屋根と柱は5年前に作られた。）

にち、供え物や生け贄のヤギを誰が捧げるのか等がそれぞれに決められている。調査結果に基づいて村の石神を分類するならば、主に、ビールやバグリ等の指定トライブや指定カーストの人びとが祈る石神、カティのみが祈る石神、特定の世帯が祈る石神、全住民が祈る石神、というように分類することが可能である。

西洋暦の毎年10月または11月には⁴⁾、村内のみならず、インドール市の各地で、女神ドゥルガの祭り「ナヴラトリ（ドゥルガプジャ）」が盛大に行われている。祭りの期間、人々は九夜に及ぶ断食（もしくは、非菜食の人びとが菜食を行う）と祭礼を行う。また十日目には、叙事詩『ラーマヤナ』に登場するラーマ王子が魔王ラヴァンを倒す神話にちなみ、巨大な魔王のはりぼてを燃やし祝う（ダシヤラ祭）。祈りのために用意された女神ドゥルガの像は、祭りのフィナーレとして川に流されるという。ナヴラトリの期間中、チラカーン村内では数箇所ドゥルガが祀られていたが、獅子に乗ったドゥルガ像はナヴラトリの期間だけ安置され、日常的にはドゥルガ像は置かれていない。

5. おわりに

本稿を通じて示したチラカーン村における石神の増加や宗教空間の充実化を端的に表現すれば、「祈りの場」の充実化である。村全体を見渡せば、隣接するピータンプール工業成長センター関連の雇用や経済規模の拡大、農業生産を通じて、人びとは経済的



写真7 女神ドゥルガの像（ナヴラトリの最終日、9夜10日にわたり祀られた女神ドゥルガの像は村人が見守る中、村人のトラックに載せられて村を去り、川に流される。）

な豊かさを手に入れつつあるように見える。もちろん住民の現金収入や経済力は、既に澤（1997,1998）が指摘しているように、住民全体に均等に増大しているわけではなく、ジャーティや学歴等と密接に関連しながら不均等に展開し、ジャーティ間のさらなる格差がもたらされている。工業労働力として直接雇用される住民、流入する工業労働者に賃貸住宅を提供して収入を得る住民、灌漑や耕作機械、長距離輸送用トラックの導入によって商品作物の販売などを手がける農家が収入を増大させている一方で、農業労働力として僅かな日当を得ながら農業経営を支える指定カーストや指定トライブの住民らが、村内に隣り合って暮らしているのである。

そういった文脈において、チラカーン村の住民らは、指定カースト・指定トライブの人びとも含めて自らの「場」としての宗教空間の充実化させている。石神が設置され、維持される状況は、筆者（相澤,2005）が、日本の阪神・淡路大震災の被災地における地蔵祭祀の維持や再生を、場所や記憶、社会の相互作用から描き出した状況と共通する部分もある。しかし、チラカーン村における寺院や石神の祭祀では、ジャーティごとの違いが厳密に定められている。つまり、工業団地による「豊さ」が村にもたらされたことで、雇用や収入といった経済的な側面の格差化が進むだけでなく、これらの宗教空間が充実することで、ヒンドゥー教的な日常生活全般においてもジャーティ間の差異が再生産されることにつながる。

工業団地は、隣接するチラカーン村に、二輪車が四輪車に変わり、耕作牛がトラクターに変わる「豊かさ」や利便性をもたらした。そのような経済的な「豊かさ」は、日常生活の場としての宗教空間を充実化させ、その結果、ジャーティ制度という階層間の差異の再生産を下支えているのである。村の寺院の建設も、隣村の人びとが山の上のシヴァ神のために作った建物も、各ジャーティや個人が所有する石神の増加も、こうした経済的な「豊かさ」の増大と関連させながら考える必要がある。

現段階のチラカーン村における宗教空間の展開においては、関根(2003)が示した歩道寺院のように、激しい交通が行き交う「非・場」としての歩道上で生きられた「場」を構築する実践、といったような権力との対抗関係やせめぎあいの状況を明確に見いだすことはできない。チラカーン村の宗教空間の充実化は、一意的に「ウール」としての「場」が構築されているようにも見える。しかも、山から石を運んで色を塗って安置するという比較的容易な方法によって、神々は顕現するのである。しかし、それらの「ウール」としての「場」を構成する宗教空間の充実化は、隣接するピータンプール工業成長センターによる雇用やインドの経済の発展によってもたらされている。その点では、関根の言う「非・場」と「場」が同じ空間に重層しせめぎ合う状況ではなく、「非・場」としての性格を持つ工業団地が、隣接する村における「場」の発展を下支えているのである。ただし、ジャーティ間の不均等な「豊かさ」に基づく「場」の構築は、経済的格差だけでなく、ヒンドゥー教的世界によって構成された日常生活や生活史全般におけるジャーティ間の格差や意識を拡大する可能性を持つ。その点では、都市的状况において下位カーストと都市権力という構図から「場」と「非・場」のせめぎ合いを捉えるという視点とは別に、「場」をめぐる村内の社会関係が、「非・場」としての工業団地によってどのような影響を受け、どのような変化をもたらすのか、といった視点が必要となるのである。

もちろん、本稿を通じて示したチラカーン村における宗教空間の変容がどのような帰結をもたらすのかについては、筆者にはまだ見当もつかない。今後は、たとえば①ローカルなヒンドゥー教的空间の充

実化は、近年台頭しつつあるヒンドゥーイズム(ヒンドゥー・ナショナリズム)と関連する可能性があるのか、②石神の増加やジャーティごとの「場」の充実化は、村の中心的な寺院の役割や意味に何らかの変化を生じさせるのか、③個人・共同体それぞれの「場」の充実化は、世帯内、世帯間、ジャーティ内、ジャーティ間、村内全体それぞれの社会関係や日常生活にどのような影響を与えるのか、といった点に関心を寄せていく必要があるが、これらについては、より多くの材料に基づいた上で改めて検討されるべきものであろう。

付記

現地調査に際し、科研費「グローバル化下でのインドにおける国土空間構造の変動と国内周辺部問題」(代表者: 広島大学岡橋秀典教授)の一部を使用した。調査に際しては、神戸大学人間発達環境学研究科の澤宗則先生及び山口大学教育学部の荒木一視先生をはじめ、多くのご協力やご助言を頂いた。また Govt. Post Graduate College Alirajpur 大学の M.L.ナート先生及び Ujjain 大学の院生諸氏、チラカーン村の住民の方々には記して感謝したい。

注

- 1) 専門技術者に頼らない日曜大工の手仕事。レヴィ・ストロースは、既に手元にあるものを創造的に組み合わせながらブリコラージュを行う人をブリコールと呼んだ。一方、専門家による近代的なエンジニアリング的思考を「栽培された思考」と呼び、ブリコラージュを生み出す「野生の思考」と対比した。
- 2) 関根(2003,17)は、「<都市的なもの>ないし都市性とは、空間形態の問題ではなく、権力システムの圧力の最前線での差異(斜度)を生き抜く実践行為の内に現出するものである」と述べ、<都市的なもの>が都市における権力性に関わる実践行為に着目するための枠組みであると説明している。
- 3) 澤(1998)は、ジャーティとは「ヒンドゥー教徒の中の社会集団であり、結婚、食事、職業に関する厳格な規制のある排他的な集団」とあり、「ジャーティ間には上下間の身分制度があるため、ヒンドゥー社会は階層社会を構成し、ジャーティ内では

相互扶助関係があるという特徴を持つ」と説明している。

4) インドの神々を祀る祭礼は、ヒンドゥ暦によって決められており、九夜を意味する「ナヴラトリ」は西洋暦の10月または11月に行われる。

参考文献

相澤亮太郎 (2005):「阪神淡路大震災被災地における地蔵祭祀一場所の構築と記憶」人文地理 57-4、pp.62-75
荒木一視 (1997):「工業団地開発と近接農村の農業構造ーインド・M.P.州チラカーン村の事例ー」、岡橋秀典編『インドにおける工業化の新展開と地域構造の変容ーマディヤ・プラデーシュ州ピータンプル工業成長センターの事例ー』総合地誌研 研究叢書 30、広島大学総合地誌研究資料センター、pp.139-169
NHK スペシャル取材班編著 (2007):『インドの衝撃』文芸春秋
エリアーデ、ミルチャ (久米博訳) (1974):『エリアーデ著作集第3巻 聖なる空間と時間』せりか書房、
Mircea Eliade (1968): *Traité d'Histoire des Religions*, Payot.Paris.
岡橋秀典編著 (2003):『インドの新しい工業化ー工業開発の最前線からー』(日本地理学会海外地域研究叢書 2)、古今書院
オジェ、マルク (森山工訳) (2002):『同時代世界の人類学』藤原書店、Marc Augé (1994): *Pour une anthropologie des mondes contemporains*
川口敏彦 (2001):『ナマステの国の神々ーネパールの赤い世界ー』叢文社
澤宗則 (1997):「工業団地開発と近接農村の社会構造ーインド・M.P.州チラカーン村の事例ー」、岡橋秀典編『インドにおける工業化の新展開と地域構造の変容ーマディヤ・プラデーシュ州ピータンプル工業成長センターの事例ー』総合地誌研 研究叢書 30、広島大学総合地誌研究資料センター、pp.105-138

澤宗則 (1998):「開発途上国の経済成長と農村環境」社会環境論研究会『社会環境と人間発達』大学教育出版、pp.154-188

斎藤昭俊 (2007):『インドの神々』吉川弘文館
関根康正編 (2003):『〈都市的なもの〉の現在ー文化人類学的考察ー』東京大学出版会
セルトー、ミシェル・ド (山田登世子訳) (1987):『日常の実践のポイエティック』国文社、Michel de Certeau (1980): *Art de faire*
外川昌彦 (2003):『ヒンドゥー女神と村落社会ーインド・ベンガル地方の宗教民俗誌ー』風響社
広瀬崇子、近藤正規、井上恭子、南埜猛編著 (2007):『現代インドを知るための60章』明石書店
南埜猛 (1997):「新興工業団地に近接する農村・チラカーンの概要」、岡橋秀典編『インドにおける工業化の新展開と地域構造の変容ーマディヤ・プラデーシュ州ピータンプル工業成長センターの事例ー』総合地誌研 研究叢書 30、広島大学総合地誌研究資料センター、pp.83-104
南埜猛 (2007):「躍進する地方都市ーインドールー」(広瀬崇子、近藤正規、井上恭子、南埜猛編著『現代インドを知るための60章』明石書店) pp.273-277
山下博司 (2004):『ヒンドゥー教ーインドという〈謎〉ー』講談社、2004年
山下博司・岡光信子 (2007):『インドを知る事典』東京堂出版
ルフェーブル、アンリ (斎藤日出治訳) (2000):『空間の生産』青木書店、Henri Lefebvre (1974): *La production de l'espace*.
Debabrata Mandal (1998): *Social structure and cultural change in the Saharia Tribe*, MD Publications PVT LTD.
Prem P. Bhalla (2007): *Hindu Gods and Goddesses; a glimpse into their vibrant world*, Pustak Mahal, Delhi.

(あいざわりょうたろう・兵庫大学・非)